

新十津川昔話【後編】

奈良県十津川郷の大水害を経て、明治23年(1890年)にトック原野(現在の新十津川町)の大地に一步を踏み入れてから今年で120年。先月号と今月号の2回に分けて、未曾有の水害に襲われた家族が、厳寒の北海道を目指して、今日の「新」十津川をどのようにして切り開いてきたかを、昔話風に分かりやすくお届けします。

今月号は、明治23年6月に石狩川を渡ってから現在の新十津川町ができるまでの後編です。

困難を極めた開墾

石狩川を渡り、トック原野に入植した十津川移民は、うつそうと生い茂った原始林を切り倒し、根を起こし、燃やしながら、少しずつ開墾を進めていった。



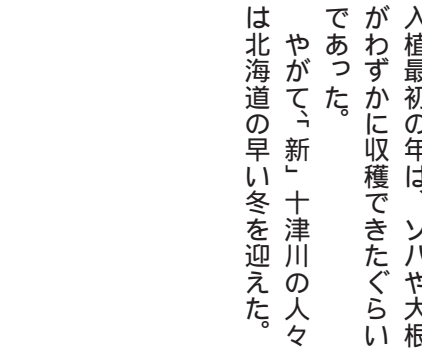
開墾の様子



十津川の人々は、もともと林業に従事していたので、伐採は得意だったが、笹や草の根が張り詰めた土地を耕す作業は、並大抵なものではなかった。

蚊やブヨなどに悩まされた入植最初の年は、ソバや大根がわずかに収穫できたくらいであった。

やがて、「新」十津川の人々は北海道の早い冬を迎えた。



子ども教育に熱意を注ぐ

文武両道を尊ぶ十津川の人々は、子どもたちの教育にはとても熱心であった。開拓に入るとすぐに学校建設に着手し、明治24年3月には徳富川を挟んで南北に1校ずつ小学



文武館

校を建てた。その後、通学の不便を解消するため学校が次々と建てられていった。

また、明治28年、母村にない高等教育の場として私立文武館を建てた。

この教育に対する熱意は、今日に至る新十津川の伝統となっている。





福井谷貯水池建設風景（大正11年）

水田が広がり
はじめる…

明治30年代に入ると北陸地方などからの移住者により、水稲の作付けも本格化した。新十津川は、夜盗虫の大発生、石狩川の氾濫などの災害に見舞われながらも、着実に農業基盤を固めていった。明治35年の一級町村制施行、同40年の一級町村制施行と、きわめて短期間での一級町村昇格は新十津川の急速な発展を示すものであり、入植者たちの不屈の取り組みのたまものであった。

一大米作地帯へ
発展し…

大正期に入ると人口は1万5千人を超え、農業生産力や財政規模の面でも空知管内で屈指の自治体へと成長していった。水田の開墾に加えて「玉置坊主」という冷害に強い水稲品種を開発。これによって道内でも第一級の米作地帯となった。石狩川の洪水に備えた治水事業もこの時期に取り組みられている。

そして現在へ…

冷害と凶作、そして戦争という厳しい時代を村民たちはよく助け合い、乗り越えていった。戦争終結と共に息を吹き返した新十津川は、昭和32年1月、ついに念願の町制施行を実現する。

しかし、昭和30年の1万6199人をピークに人口は減少傾向をたどり、他の多くの農山村と同じく過疎という新

たな課題を抱えていく。様々な時代の変化に揺れながらも、新十津川は未来に向かって着実に歩み続ける。

（絵 井上正治さん）



現在の街並み



母村 十津川村